

学校の周りの自然を生かす

学校の周りの自然を生かす

野外活動や自然観察をふくむ単元では、長期にわたって観察できる場所を探しておくことが必要になります。

周りに豊かな自然環境のある学校

学校の近くに雑木林や草むらなどがあれば、多様な動物や植物の観察ができます。秋や冬になったときも、隠れている昆虫を見つけたり、鳥の活動のようすを観察することにも適しています。

周りに公園や池などのある学校

都会の学校でも、近くに公園がある場合が多くみられます。公園では、動植物の環境をよくしようとする取り組みをしているところも多く、協力してもらうこともできます。また、歩いていける範囲であれば、毎回の観察は学校の周りでいい、四季折々に観察に出かけることもできます。生物の種類や数が多ければ、子どもの興味も高まります。

学習園や樹木のみしかない都会の学校

限られた自然でも、よく注意すれば昆虫や鳥の観察ができ、子どもの興味・関心の高まりがポイントとなります。そこで、鳥のえさ台をつくって鳥を呼びよせたり、ピオトープをつくって昆虫や水辺の生物を呼びよせることが考えられます。人の手が加わったものではありませんが、生物が学校に来ることは、児童にとってわくわくするできごとになります。しかし、えさ台を設置したからといって、すぐに野鳥は来ません。継続してえさをやり続けることで、スズメがまず来て、しばらくするとヒヨドリなどが来るようになります。また、時期によっても来る鳥が異なります。

鳥のえさ台には、えさが少ないときのほうがよく鳥が来ますが、次のことに気をつけましょう。

- ・猫に跳びつかれないように、1m以上の高さにします。
- ・とまって食べやすいように、台は浅くします。
- ・雨水がたまらないように、水抜き穴をつけます。
- ・明るく、見通しのよい場所につくります。
- ・掃除はこまめにします。
- ・ご近所にふん害が起きないように注意します。

穀物、果物、脂身など、えさによって来る鳥もちがいます。スズメが来るようになれば期待できます。根気よく待ちましょう。



観察の手順とポイント・百葉箱

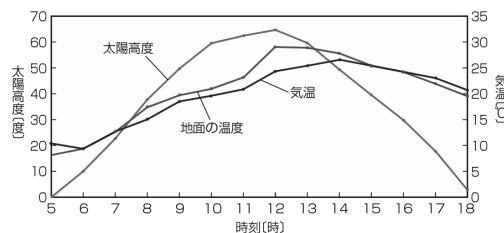
測定結果を整理できるように、測定日・測定時刻・気温・天気を記入できる表をつくります。

晴れた日と、曇りや雨の日に、昼間の気温を約1時間ごとにはかります。気温をはかったときの天気もあわせて記録するようにします。使う温度計は、温度計ごとのばらつき（温度差）を無くするため、一連で同じものを使うようにします。

また、測定時刻は厳密に1時間ごとでなくてもかまいません。他の授業に支障がないように設定しましょう。天気の記録にあたっては、天気図に用いられる記号を使うことも考えられます（晴れ：○，曇り：☁，雨：☂）。記録した気温の変化を、折れ線グラフに表します。児童が折れ線グラフをかきやすいような、あまり目盛りが細かいすぎないグラフ用紙を準備しておきましょう。算数科においても、気温の変化についての折れ線グラフの読みかきを4年で行うので、関連を図るとよいでしょう。晴れの日と曇り、または雨の日の観察は、できるだけ近い日に行うことが望ましいでしょう。

太陽高度が最高になる正午に気温が最高にならないのは、空気は日光によってあたためられるだけではなく、日光によってあたためられた地面からもあたためられるからです。地表面の温度は、正午ごろに最高になります。

太陽高度・気温・地表面温度の



百葉箱

百葉箱は「ひゃくようそう」、または「ひゃくようばこ」と呼ばれる、自記温度計や乾湿計、最高最低温度計などを収めた気象観測器具です。

百葉箱には次のような特徴があります。

- ・材質が木でできており、熱を伝えにくい。
- ・白く塗られているため、日光を反射して熱がこもらないようにしている。
- ・よろい戸になっており、風通しがよく、日光や雨が入り込まないようにしている。
- ・扉が北向きになっていて、開けたときに日光が入り込まないようにしている。
- ・地面からの照り返しを防ぐため、芝生の上に置かれている。
- ・中の温度計の高さが約1.2～1.5mになっていて、おおむね気象庁の基準に沿っている。